

ライフスタイルの確立に関わる
小児期の心理発達の要因の検討（第二報）
— 子どものパーソナリティと親の養育態度 —

大石 昂

要約：小児期からの健康的なライフスタイルの形成において、心理発達の要因を考慮することはきわめて重要である。本研究においては、日本版MYTHを参考にしながら、パーソナリティと、パーソナリティおよび生活習慣の形成に重要な影響を及ぼす親の養育態度の関連について調査、分析を試みた。

見出し語：社会的向性、自律性、競争性、パーソナリティ、養育態度、富山スタディ、タイプA行動、MYTH

はじめに

成人病と心理的要因の関連という問題では、Friedmanら（Friedman & Rosenman, 1959, 1974）による冠状動脈性心臓疾患（CHD）の危険因子としてのタイプA行動特性の指摘がよく知られている。タイプA行動特性とは、「一般に時間切迫と焦燥（time urgency and impatience）、攻撃—敵意（aggressiveness-hostility）、競争性をともなった達成努力（competitive achievement-striving）、これら3つの下位特性を強く持つ特性」（山崎、菊野、1990）であり、その逆の行動特性はタイプB行動特性と呼ばれる。

このタイプA行動特性は、幼児期にすでに出現することから、この時期の子どもを対象とした測

定法が作成されている。山崎らは、このうちMYTH（Mathews Youth Test for Health; Mathews & Angulo, 1980）をもとにして、日本版幼児用MYTHの標準化を試みている。（山崎、菊野、1990）しかし、幼児・児童期のタイプA行動特性のstabilityは必ずしも高くなく、それがほぼ安定するのは思春期を過ぎてからであるとされている。（Steinberg, 1986）

この意味で、幼児・児童期は、タイプA行動特性の形成途上にあるとも考えられ、幼児期から思春期にかけて、これらの心理特性がどのように形成・変容していくのかを研究することが、健康的なライフスタイルの形成という点できわめて重要である。

富山大学教育学部幼児心理学研究室

(Dept. of Infant Psychology, Faculty of Education, Toyama University)

本研究においては、山崎らによる日本版MYTHの17項目に、大石（1994）によって抽出された向一社会性と自立に関する8項目を加えて、ライフスタイル形成に関わるパーソナリティ要因の検討を行う。このうち本稿では、質問項目の信頼性についての検討結果を報告する。

さらに、これらのパーソナリティ要因の形成過程を分析するために、これと重要な関わりを持つ親の養育態度について調査し、その関連をみる。

方法と手続き

(1) 調査項目の作成

幼児のパーソナリティ特性に関する調査項目として、下記に示す25項目のアンケート調査を作成した。

- 1- 1. ゲームをするとき、競争心が強くでる。
- 1- 2. ものごとを行うときは、ゆっくり、考えながらするよりも、はやく精力的に行う。
- 1- 3. 他の人を待たねばならないとき、いらいらしてくる。
- 1- 4. ものごとを急いでする。
- 1- 5. ともだちに腹を立てることはまれである。
- 1- 6. 他の人の邪魔をする。
- 1- 7. いろんな活動でリーダーになる。
- 1- 8. すぐにいらだつ。
- 1- 9. 他の人と競争するときは、いつもより力を発揮する。
- 1-10. 口げんかをよくする。
- 1-11. 他の子どもが自分よりゆっくりしているとき、しんぼう強く待つことができる。
- 1-12. ものごとを行うとき、他の子どもよりもよくしようと頑張る。

- 1-13. じっと長い間すわることができる。
- 1-14. ゲームや園でのおけいこは、楽しむより、他の子ども以上によくできることをもとめる。
- 1-15. 他の子どもからリーダーとしてたよられている。
- 1-16. 競争心が強い。
- 1-17. 喧嘩ばやい。
- 1-18. 仲間に入るよりも、友だちのすることを見ていることが多い。
- 1-19. 出かけるときなど、せかされないと支度できない。
- 1-20. 自分でうまく気分転換ができる。
- 1-21. 誰とでもすぐ友だちになれる。
- 1-22. ひとり遊びが好きである。
- 1-23. 自分でできることでも親にやってもらいたがる。
- 1-24. 朝はなかなか起きてくれない。
- 1-25. 気分の変化が激しい。

このうち、1～17は、日本版MYTHの項目で、1,2,7,9,12,14,15,16,は、competitivenessに、それ以外は、impatience-aggressionにそれぞれ関する項目である。また、項目18,21,22は社会的向性、25は情緒易変性、20は欲求不満耐性、19,24は自律性にそれぞれ関する項目である。

さらに、この幼児のパーソナリティに関連すると思われる、親の養育態度について、下記の14の調査項目を作成した。

- 2- 1. 子どもを見るとき、ついよその子と比較してしまう。
- 2- 2. 子どもが友達を自分の家に連れてくるの

は歓迎しない。

- 2- 3. 子どもが何かするときには、できる限り親は手を貸さないようにしている。
- 2- 4. 競争心（闘争心）のある子どもに育てたい。
- 2- 5. 何をするにもつい子どもに命令口調になってしまう。
- 2- 6. 子どもが楽しいと思うようなことは、できる限りやらせるようにしている。
- 2- 7. 子どものペースに合わせられなくていららすることがある。
- 2- 8. わが子が競争に負けると自分のことのようにくやしい。
- 2- 9. いろいろな人に接する機会が多い。
- 2-10. 子どもが遊んだ後の片づけをしていないと、気になって自分で片づける。
- 2-11. 子どもを、「早くしなさい」とせかすことが多い。
- 2-12. 子どもがものを欲しがると結局買い与えてしまうことが多い。
- 2-13. 子どもが親の言うことを聞かないとついカッとしてしまう。
- 2-14. 子どもの遊びに最後までつきあうことができる。

（3）調査対象

富山県内の都市部と農村部において、保育所（幼稚園）に在籍する年中児を持つ母親。

1-1から1-25までのパーソナリティに関する項目は、母親による記入とともに、保育所（幼稚園）の担任による記入も求め、信頼性の検討を行う。そのため、調査は記名式で行う。

結果と考察

本稿においては、農村部におけるデータの一部について分析を行い、考察を加えることとする。

（1）サンプルの概要

表-1 回収されたサンプル

男児	63
女児	52
合計	115

調査時期は、1995年1月～2月である。

（2）調査項目の信頼性について

回収された調査用紙について、パーソナリティ調査の各項目の信頼性を検討した。表-2は、各項目についての、母親と担任による評定の相関係数である。

全体としては、期待されたほど高い相関は認められなかった。19（出かけるときなど、せかされないと支度できない。）や24（朝はなかなか起きてくれない。）等の項目の相関が低いことについては説明するまでもないであろう。

全体としては、competitiveness や社会的向性に関する項目の相関が高かった。「リーダーシップの発揮」など、保育所等の子どもの集団関係においてよく目立つ特性に関して特に担任保育士の評定が正確になる傾向があると考えられる。逆に、「じっと待つことができる」など、目立ちにくい特性に関しては、評定が不正確になるのではないだろうか。母親による評定の信頼性については、

さらに検討を加える必要があると考えられる。

表-2 母親と担任の評定の相関係数

項目	r
1	.36
2	.21
3	.08
4	.26
5	-.03
6	.21
7	.47
8	.06
9	.14
10	.23
11	.05
12	.01
13	.08
14	.19
15	.38
16	.35
17	.28
18	.31
19	.16
20	-.06
21	.30
22	.17
23	.23
24	-.02
25	.10

(2) パーソナリティと養育態度の関係

ここでは、competitiveness に関する項目を中心に、子どものパーソナリティと親（母親）の養育態度の関連を検討することとする。

表-3 競争性に関する相関係数

項目	C01	C09	C14	C16
D01	.00	-.14	-.02	-.07
D04	.07	-.12	-.13	-.04
D08	.06	-.03	.21*	.01

* <.05

表-3に示されるように、C14とD08の間に弱い相関がある点を除けば、上記の項目に関してみる限り、相関はみられないといってよいであろう。すなわち、親がわが子に対して強い競争心を求めたり、競争的な視点から見たりするかどうかは、子どもの競争性の強さとはなんら関連しないということになる。

まとめ

日本版MYTHの17項目に、社会的向性、自律性などに関する項目を加えた、25項目からなる幼児のパーソナリティ調査の信頼性の検討を行った。母親と保育所保育による評定の相関は、特性の種類によって-0.06 から0.47まで変動した。リーダーシップの発揮など、集団の中で目立つ項目に関して相関が高い傾向があった。

幼児のパーソナリティ特性と親の養育態度の関連を検討したところ、競争性に関しては、相関が

ほとんど認められなかった。

(本報告は、回収された資料の一部についての
検討結果である。)

文献

Friedman, M., & Rosenman, R. H. Association of
specific overt behavior pattern with
blood and cardiovascular findings. *Journal*
of the American Medical Association,
1959, 169, 1286-1296

Friedman, M., & Rosenman, R. H. *Type A behavior
and your heart*, 1974, Knopf, N.Y.

Steinberg, L. Stability (and Instability) of
type A behavior from childhood to young
adulthood, *Developmental Psychology*,
1986, 22, 393-402

山崎勝之, 菊野春雄, 日本語版幼児用Type A検査
(MYTH)の作成, *心理学研究*, 1990, 61,
155-161

黒田裕子, 子どものタイプA行動の表出に及ぼす
下位特性と脅威的状況の効果, *教育心理学研
究*, 1992, 40, 340-347



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児期からの健康的なライフスタイルの形成において、心理発達的な要因を考慮することはきわめて重要である。本研究においては、日本版 MYTH を参考にしながら、パーソナリティと、パーソナリティおよび生活習慣の形成に重要な影響を及ぼす親の養育態度の関連について調査、分析を試みた。